様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１０日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０８６０
研究課題名（和文）　主体的課題化学習における「個志向と集団志向の緊張力学」に関する理論的実証的研究
研究課題名（英文）　A Theoretical and Verifing Research on "Tension Dynamics between Individual-oriented Intention and Group-oriented Intention" in Self-motivated Learning Oriented for Life Problems.

研究代表者　片岡　弘勝（KATAOKA Hirokatsu）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２２４４３７

研究成果の概要（和文）：本研究は、「地域」概念の日本的形態が日本社会における主体的課題化学習を深める上で有効性をもつという仮説を検証した。再設計した日本的地域モデル（下記）を四つの実践事例に則して考察した結果、一定程度妥当することを検証した。その地域モデルとしては、これまでの片岡による研究(2007-2008 年)の成果（①「自然村的秩序」のもつ内発的エネルギー、②「中央」勢力圏に対する自立志向、③生活圏の異心円的複合構造、④個人志向と集団志向の緊張力学の存在、という要件）に加えて、新たに⑤「地域における生活価値・生産価値及び合理的知」を不断に相対化する契機を醸成するエートスの存在を設定した。

研究成果の概要（英文）：
This study verified a hypothesis that the Japanese "community" concept , not the European one is effective to self-motivated learning oriented for life problems in Japanese fields. As the result of this verification, this study clarified that the Japanese "community" concept model(later mentioned) was effective in above mentioned context, through examining this the Japanese "community" concept model in analyzing four practices of self-motivated learning oriented for life problems. The past research by KATAOKA(2007-2008) clarified that the Japanese "community" concept model was constructed with the following four factors.
1. The existence and re-production of spontaneous energy that is produced by the nature community field.
2. Independence-oriented postures from "center area" in economical, political and cultural dimensions.
3. The complex structure (without centered area) of life-production fields: the mandala outlook on the world.
4. The tension dynamics between individual-oriented intention and group-oriented intention.
In addition to these four factors, this study pointed out following the fifth factor.
5. The existence of ethos that brews moments for checking life-production values and rational knowledge in community relatively.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育学、社会教育、住民主体の学習、課題化学習、地域概念、個と集団、上原専祿、生涯学習

１．研究開始当初の背景

本研究が主題とする主体的課題化学習は、社会教育における学習論研究の焦点であり、その中心的論点として、住民学習者の自己教育活動の主体性形成に順接する「学習の主体性と科学性の統合」のあり方が問われ続けてきた。しかし、現在でもなお主体的課題化学習の成立条件は充分には解明されていない。その主因は、地域概念設定の曖昧性にあると考えられる。こうした課題意識に立ち、地域概念の欧米的形態ではなく、日本的形態、なかでも「個志向と集団志向の動態性を生み出す緊張力学」に着目することになった。その緊張力学とは、個の主張と集団秩序とを安易に予定調和させず、両志向の対立・葛藤を前提しその両極を徹底させることによって生まれる動態性を導くダイナミクスを想定した。この緊張力学を追究することによって冒頭の中心的論点に接続する地域概念の日本的形態を深めることができるという見通しを持った。

２．研究の目的

本研究は、地域概念の日本的形態のモデル再設計を介して、主体的課題化学習の成立条件と当該フィールド「地域」における「個志向と集団志向の動態性を生み出す緊張力学」との連関構造を解明することを目的とした。以上のテーマに接近するため、筆者（片岡）は、2007～2008 年度の科学研究費補助金を受けた研究（「日本的地域概念と主体的課題化学習との連動に関する理論的実証的研究」、以下、「2007～2008 年研究」と略記する）により、有効性のある日本的地域概念の構成要件（要素）として下記の４点を設定した。①自然村的秩序のもつ内発的エネルギーの存在と再生産、②「中央」勢力圏に対する経済・政治・文化の自立志向、③生活・生産圏の異心円的複合構造（曼荼羅的世界観）、④個志向と集団志向の動態性を生み出す緊張力学。本研究は、この成果に基づき、さらに④を深めることによって、前記した地域モデルを更新した上で再設計し、地域概念の日本的形態が日本における住民学習者の主体性形成を図る上で有効性を持つという仮説の検証作業を継続させた。

このため、下記の分析・研究を行う。

(1)理論研究による「地域」概念モデルの再設計

(2)個別具体の実践事例による前記新モデルの検証

３．研究の方法

下記の(1)～(6)により研究を行った。

(1) 理論研究１：地域概念の日本的形態における「個志向と集団志向の緊張力学」に関する理論分析
「課題化的認識」方法を提起した上原専祿の主体形成論・地域論の分析の継続

(2) 理論研究２：地域概念の日本的形態の再モデル化
１の上原研究の成果に基づきモデルの更新・再設計を試みる。

(3)実践分析と仮説の検証１：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（農漁村）

(4) 実践分析と仮説の検証２：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（都市住宅地）

(5)地域概念の農漁村ケースと都市住宅地ケースとの比較検討により共通要素と個別要素の抽出

(6)総括：地域概念の日本的形態と主体的課題化学習の成立との連関構造の総括的整理

４．研究成果

本研究は、前記した「2007～2008 年研究」の成果に基づき、それを深化させるものであるため、深化させた成果を記述する便宜上、「2007～2008 年研究」の成果の要点と本研究（「2010～2012 年研究」）の成果を併記することにする。

(1)理論研究１：地域概念の日本的形態における「個志向と集団志向の緊張力学」に関する理論分析

「課題化的認識」方法を提起した上原専祿の主体形成論・地域論の分析

・「法則化的認識」や「インテレクトの力」では「一挙に把握できない、なにものか」（「人間存在の無限の可能性」（記述し得ないものを含む）が存在するという了解）を含む生活現実とその生きた動態を「そのままそれとして」認識することが志向されている（「史心」精神）。

・認識の担い手自身の「問題化・対象化」と、認識対象となる生活現実の「問題化・対象化」の両方が同時に強く重視され、両極間の＜往還＞が強い勢度で動的に構想されている

（「史心」精神）。
・前記した動的な＜往還＞は、個人志向と集団志向の往還を含む。

(2)理論研究２：地域概念の日本的形態の再モデル化
　１の上原研究の成果に基づきモデルの更新・再設計を試みた。
「2007～2008 年研究」の成果としての地域概念モデルは、①自然村的秩序のもつ内発的エネルギーの存在と再生産、②「中央」勢力圏に対する経済・政治・文化の自立志向、③生活・生産圏の異心円的複合構造（曼荼羅的世界観）、④個志向と集団志向の動態性を生み出す緊張力学、という４つの構成要件（要素）であった。
　本研究（「2010～2012 年研究」）により、新たに⑤として、「地域の生活価値・生産価値」及び「地域における合理的知」を不断に相対化する契機（上原専祿理論における「史心」）を醸成するエートスの存在、を加えた。

(3)実践分析と仮説の検証１：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（農漁村）
　Ａ　愛媛県宇和島市内の遊子漁業協同組合の地域づくり
「2007～2008 年研究」の成果＝科学の成果を用いて海水の汚れを防ぎ「２年もの真珠」のみを生産し地域づくりを継続。こうした地域づくりの原動力となった学習・研究活動とそれに深く関わる「地域」イメージに注目した。とくに 1960 年頃の沿岸漁業不振を契機にして養殖漁業に転換し、「2 年もの真珠」のみを生産する誇りが地域の誇りにつながっている。
本研究（「2010～2012 年研究」）の成果：
・「海は地域住民の共有財産」という意識の共有。
・個人の営漁意欲への志向性と集落内の相互扶助・協同・連帯秩序形成への志向性の両者が存在した（例＝「２年もの真珠は死ぬ率が高くなるし、換金も遅れる。周りから不協和音も出たが、耐え抜いた。おかげでいまは品質抜群の折り紙付き。真珠の変色ショックも円高も無縁で切り抜けている。」（『朝日新聞』名古屋本社版、1989 年 9 月 8 日付け夕刊の「窓・論説委員室から・小さな漁村で」より一部引用）

Ｂ　長野県下伊那郡松川町の健康学習
「2007～2008 年研究」の成果：1960 年代初め頃より住民主体の健康学習の取り組みが蓄積されてきた。その内発的な学習・研究のエネルギーに関わって、当該「地域」イメージに注目した。話合い学習と実態調査学習が３つの旧村内の各集落を基盤に展開。「郷立総合飯田大学」の創造のため、無私の尽力を続けた宮澤芳重氏の理念に住民が共感して、宮澤氏の死後、「芳重地蔵」を建立（1972 年）。その向学心にもえた生き方と地域への情熱を貫いた姿から、「その意志をつぎたいと思います」（碑文より一部引用）という住民の「地域づくりと学習」を重視するエートスの存在。
本研究（「2010～2012 年研究」）の成果：学習活動の過程で、多様な性格のリーダーの存在が学習を継続させる内発的なエネルギーとなった点を確認。学習活動における個性的な主張・活動を尊重する志向性と、学習集団の秩序を形成する志向性の両者が一定の緊張関係をもって存在。

(4)実践分析と仮説の検証２：内発的地域づくり実践の個別具体事例の調査研究（都市住宅地）

Ｃ　大阪府貝塚市内の「ＮＰＯ法人安心して老いるための会」の地域福祉ネットワーク
「2007～2008 年研究」の成果：同会は下記の活動を展開。こうした地域づくりの原動力となった内発的エネルギーに関わって、次の「地域」イメージに注目した。「経済的安定」「健康問題」「孤独不安」をめぐって様々な課題が生じている。「老い」の厳しい諸現実を前にして、介護ネットワークづくりに取り組む。介護保険事業のみならず、介護保険を使わない、生き生きとした老後を皆で創る交流・交歓施設「あいあい」の運営、「老い」の相談に応じる事業・「老い」のたまり場として事業を展開。人間の尊厳・誇りをみつめ直す活動（対話、文化活動）とケース検討会等での共同学習→理念の共有。
本研究（「2010～2012 年研究」）の成果：個々の「老い」のケースに即した丁寧な対応の志向性を維持しながら、地域に現象している「老い」の問題・背景及びそれらへの対応に関わる共通要素の模索も行われている。

Ｄ　奈良県奈良市富雄地区の安全・安心のまちづくり実践
「2007～2008 年研究」の成果:2004 年 11 月、小学校１年生の女子児童が誘拐、殺害された事件の後、自治会と保護者が中心となって集団登下校が始まり、現在でも継続されている。安全・安心なまちづくりが展開されている。こうした地域づくりの原動力となった内発的エネルギーに関わって、次の「地域」イメージに注目した。事件の再発を防ぐための、安全・安心のまちづくりへの志向性（犠牲者への想念と誓い）の共有（その活動の中で「地域」への誇りに注目した）。自治会、ＰＴＡ、学校の連携と信頼関係、自治会のネットワーク、命の尊厳への視点から食育実践の開始。

本研究（「2010～2012 年研究」）の成果：集団登下校システムにおける個別地点での安全対応の充実志向と、学区全体の集団登下校安全システムの充実志向の両者の存在。

(5)地域概念の農漁村ケースと都市住宅地ケースとの比較検討により共通要素と個別要素の抽出

「2007～2008 年研究」の成果：

・共通要素＝「地域」モデル要件の③④
・都市住宅地ケースの個別要素＝モデル要件①のような旧来の自然村的秩序ではなく、地域福祉および児童安全見守りという個別の生活課題に即したネットワークがつくられ機能し、新たな地域連帯（絆）が生まれており、内発的なエネルギーが生み出されている。
　モデル要件②については、経済的自立性というよりも、当該地域の「誇り」や、人間連帯によって支えられる「誇り」の形成を志向している。

以上を小括すると、「(2)理論研究２」で既述した「地域」モデルのうち、農漁村ケースでは①②③④が、都市住宅地ケースでは③④が、一定程度、妥当することが検証された。都市住宅地にとって①は、現代的な新たな絆の生成として位置づけられる。

なお、四つの実践事例に共通するもう一つの要素は、「死者との対話」あるいは「過去の苦い経験との対話」により学習の内発的エネルギーが生み出されている点である。

本研究（「2010～2012 年研究」）の成果：モデル要件⑤「地域の生活価値・生産価値」及び「地域における合理的知」を不断に相対化する契機（上原専祿理論における「史心」）を醸成するエートスの存在は、A、B、C、D の４つの実践事例すべてについて共通して確認することができた。とくに注目される点は、モデル要件⑤のエートスの形成を促進する重要な契機としてモデル要件④「個志向と集団志向の動態性を生み出す緊張力学」が存在する点、すなわち、④と⑤は密接に連動していることである。

(6)総括：地域概念の日本的形態と主体的課題化学習の成立との連関構造の総括的整理

以上の考察により、「地域」概念の日本的形態（前記した地域モデル①～⑤の要件）が日本社会における住民学習者の主体性形成をはかる上で有効性をもつという本研究の仮説は、四つの事例に則して、既述したような範囲内において一定程度、妥当することが検証された。

その日本的形態の構造については、前記した①～⑤の構成要件から成るものであり、なかでも本研究の中心主題である④「個志向と集団志向の動態性を生み出す緊張力学」は、⑤のエートスを形成する上で促進契機となっているという構造も指摘することができた。個の主張と集団秩序とを安易に予定調和させず、両志向の対立・葛藤を前提しその両極を徹底させることによってこそ生まれる動態性を導くダイナミクスが地域モデル要件⑤を促進させ、主体的課題化学習を活性化させる条件となることが一定程度、確かめることができたと考えられる。

以上の知見と視点は、主体的な課題化学習の展開構造を分析する際、内発的な学習のエネルギーが生み出され、継続される状況を分析する上で有効性をもつと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 片岡弘勝「上原専祿「主体性形成」論における認識深化の方法論理―固有の「リアリズム」を醸成する認識の動態性―」（『奈良教育大学紀要』第 61 巻第 1 号（人文・社会科学、PP. 13-26、2012 年、査読無し）

〔学会発表〕（計２件）

① 片岡弘勝「上原専祿「主体性形成」論における「史心」の位置と構造―『史心抄』(1940 年）にみる動態的認識方法―」（教育史学会第56回大会での研究発表、2012年9月23日、会場＝お茶の水女子大学（東京都内））

② 片岡弘勝「上原専祿「主体性形成と学習」論研究（その７）―認識深化の方法論理―」（日本社会教育学会第 58 回研究大会での自由研究発表、2011 年 9 月 17 日、会場＝日本女子大学人間社会学部（神奈川県川崎市内））

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０　件）

〔その他〕

該当事項なし。

６．研究組織

(1)研究代表者

片岡　弘勝（KATAOKA Hirokatsu）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２２４４３７

(2)研究分担者

該当事項なし。

(3)連携研究者

該当事項なし。